フェア

岡山大学大学院自然科学研究科教授 高井 和彦
Kazuhiko Takai

まだ私自身、学部生だった頃、京都大学の図書館で、机に向かい最新の化学雑誌を広げ熱心に読んでおられる小田良平先生をお見かけすることがよくありました。もちろん、先生がご退官されたあとのことです。

その当時のことを思い出すと、図書館で過去の文献を調べることは、いわば「力仕事」でした。化合物を調べるには、あの分厚く重い Chemical Abstracts(CA)の5年ごとにまとめられた Collective Index の分子式索引からスタートし、次に CA のある年の刊のページを探します。そこで調べ、本来のジャーナル、それも製本された分厚い冊子を、場合によっては地下の書庫に見に行く、その繰り返しだったからです。最近の学生さんはその話を聞いても、なかなかイメージできないかと思います。PC の前に座ってキーボードをたたき、ネット上のデータベース(DB)を移動しながら目的の化合物の文献を探すことが、ふつうになってきているからです。

ここでもし、「そうだ、たしかに便利になったものだ」あなた自身そう感じているのであれば、実はとても恵まれているといえます。それほど、すいすいとジャーナルに辿り着けない研究環境のところが少なくないのです。

ところで最近、ジャーナルの種類が異常に増えたように思いませんか。その昔、野崎教授室の北の壁一面は天井まで棚があり、ほとんどすべてジャーナルで埋まっていました。それでも雑誌は、*JACS*, *JOC*, *Tetrahedron*, *TL*, *Synthesis*, *JCS Chem. Commun.*, *PerkinTrans II*, *Angew. Chem.*, *BCSJ*, *Chem. Lett.*, *C&E News*, 化学と工業、有機合成化学協会誌くらいでした。たしかに、化学が発展し、とくに境界領域が広がったこと、アジア諸国などの発展が目覚ましいこともジャーナルが増えた理由ですが、それ以外に、出版社によるジャーナルのDBへの囲い込みが大きな要因となっています。大手出版社は重要な雑誌を囲い込み、そうでない雑誌とパックにして契約を迫ってきます。図書館は、大学の規模にもよりますが、それぞれに毎年数千万円の金額を払っており、この金額が払えないと、実際には、どんな重要な雑誌でも大学図書館経由のオンラインでは見えないという状況になります。あなたがストレスなくオンラインでそれら

のジャーナルに辿り着いているとすると、大学はそのお金を払ってサポートしているということになります。この大手出版社系以外に中小出版社、さらには ACS や RSC など学会系のジャーナルがありますが、大手出版社系への出費が多いために、そこまでカバーできていない大学が少なくありません。恵まれた大学ばかりではないと書いたゆえんです。また、現在は異常な円高なのでオンラインジャーナルやDBの価格上昇分(毎年5-7%)はほぼ吸収できていますが、その環境がいつまでも続くわけではありません。将来、財政的に厳しい事態が必ずやってくると考えられます。

現在、恵まれた環境にいる学生さんの中には、できればアカデミックで研究に打ち込みたいと考えている方も少なくないと思います。しかし、現実には大きな大学での募集がそれほど多くないので、まずはどこか公募で採用されたところからスタートし、そこで頑張って成果を上げ、次のステップに行く、という選択肢も考えることと思います。分析機器などのインフラは学内外の共同利用で、学生のモチベーションは教員の鼓舞で乗り切るとしても、情報インフラは日々の研究を進めるのに不可欠で、ボディーブローのように効いてきます。陸上競技の100m走で、一見、同じスタートラインに立っているようで、じつはスパイクを履くことができれば、同じ競争をしているとは言えないのではないのでしょうか。チャンスが多くの人にあり、フェアな競争ができ、その中で勝ち抜いた研究者が、次の準決勝に進める。そのような、環境の整備が重要で、このことが、ひいては日本全体の研究力の底上げにつながると思います。

現実にはどうすればよいか。現在、大手出版社系のジャーナルなどは、図書館のコンソーシアム(JUSTICE)として交渉し、それを受けて個々の大学と出版社が契約しています。それを一歩進め、同じ情報インフラを各大学に提供するために、国として大手出版社と交渉し、異常に高い価格の是正を求めるとともに、国が一括して契約し支払うシステムを早く確立することが望まれます。

(2012年1月23日受理)